

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

<研究ノート> 第一次世界大戦期のデモクラシーと軍国主義をめぐる言説

著者	福島 良一
雑誌名	埼玉学園大学紀要．人間学部篇
巻	16
ページ	222(27)-213(36)
発行年	2016-12-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1354/00000473/



第一次世界大戦期のデモクラシーと

軍国主義をめぐる言説

福島 良一

はじめに

本稿は第三高等学校を卒業した後、赤松克麿が東京帝国大学法科大学政治科に入学してから新人会創設の時期（第一次世界大戦期）に展開された「デモクラシー」（民本主義）と「軍国主義」をめぐる諸言説を紹介しつつ彼の動向を素描し、大戦後の赤松の思想の方向性を展望する。

一 「デモクラシー」と「軍国主義」をめぐる姉崎・水野論争

赤松は一九一五（大正四）年九月東京帝大法科大学政治科に入学したが、当時は折しも第一次大戦の時代であった。この戦争は彼が三高に在学していた一九一四（大正三）年七月に勃発し、その後長期化の様相を呈するに至っていた。ヨーロッパで始まった第一次大戦は元来、イギリス、フランス、ロシアを中心に形成された三国協商とドイツ、オーストリア、イタリアを中軸とする三国同盟との帝国主義陣営間の軍事紛争という性格を色濃く反映さ

せたものであったが、一方で大戦の本質を「デモクラシー」対「軍国主義」の主義・思想上の争いという側面から捉えようとする見方も提起されていた。日本の政治運動や言論界などにおいても、日本が八月に「デモクラシー」を標榜する協商側の陣営に加わる形で参戦し、「軍国主義」のドイツに敵対しているイメージが描かれることによって、デモクラシー擁護の気運が醸成されていった。第一次憲政擁護運動に触発され、当時民衆政治への関心を強く抱いていた赤松も、第一次大戦下の日本で沸き起こりつつあったデモクラシー擁護の「思想的新気運」を感じ取っていた。彼は後年次のように述べている。

「第一次世界大戦は、ドイツ、オーストリーの軍国主義に対するイギリス、フランス、アメリカなどの民主主義の戦いである」と宣伝され、そして我が国が後者に加担して参戦したので、民主主義思想の進展には、国内状況が有利になってきた。……大正時代に入って、憲政擁護運動などが起り、国民は伝統的な軍国主義、官僚主義に対して漸く反感を抱きつ、あつ

たのであるから、大戦が勃発してから、英米の民主主義を支持する空気が強く湧いてきた。⁴¹

第一次大戦をこうした主義・思想上の争いと捉えつつ、デモクラシー支持の立場から「デモクラシー」を「軍国主義」と対立する概念として位置づけた論者に宗教学者の東京帝大教授姉崎正治がいる。彼は「デモクラシー」（民本主義）と「軍国主義」をそれぞれ次のように特徴づけていた。すなわち、「一社会内に於て、民本主義は、各個人の円満な発達を社会的協調の生存に求める主義であるから、之を各国民の間に応用すれば、国家は其を形成する人民（又は民族）自発の同心結合を基にして、各自治自決に依つて自らを処置する権利を有すると共に、此の自決権は互に他民族を侵さぬ様にして、国際的協調の中に生存発達し、又国際協調の為に尽すべしといふ事になる」。⁴²他方、「軍国主義」は「軍事思想を全く攻撃精神と同一視し（現に軍人は多く之を高唱する）此精神を外に発しては侵略を行はうとし、内に対しては万般の設備を此精神に基く主義組織で一律にせうとする気風、主義、実行」である、と。姉崎にあつては、「デモクラシー」とは対外的には「侵略」の否定と「国際協調」、対内的には各人の個性と「社会的協調」を重視するものであり、一方「軍国主義」は「攻撃精神」の発露としての対外「侵略」を誘発するともに、自国民に厳格な「規律」を強要するものとされたのである。

だが、このような特に対外的な「侵略」をその属性と見なす姉崎の「軍国主義」解釈に対しては異論を唱える者もいた。当時現役の海軍大佐であった水野広徳もその一人で、姉崎を批判しつつ自己の「軍国主義」論を展開している。水野は「侵略主義」を「軍

国主義」に特有のものとする主張をイギリスによるデマゴギーだとしながら、次のように否定した。

「現時の如く、軍国主義を以て侵略主義、悪魔主義の代名詞と為すに至りたるは、近年露国及び独逸の優勢なる軍事威力をば、憂ひ、恐れ、嫉み、惡むの結果、英国人に依つて放たれたる惡声に基づくのである。英国の此の惡声に対し、独逸は之に酬ゆるに海洋独占主義なる言葉を以てし、英国が大海軍を擁して、世界の海洋を独占するの非を攻撃した。左れば英人の云ふ独逸の軍国主義と、独人の云ふ英国の海洋独占主義とは、海陸の差こそあれ、全然異名同質のものである。軍国主義が侵略主義なれば海洋独占主義も亦侵略主義と云へる。海洋独占主義が国防主義なれば軍国主義も亦国防主義と云へる」。⁴⁴

水野からすれば、姉崎の主張するような「攻撃精神」が生み出す「侵略」志向は、「軍国主義」国家ドイツの専有物ではなく、「大海軍を擁して、世界の海洋を独占」せんとするイギリスなど「正道人道を大呼し、自由平等を高唱する君子国」⁴⁵においても共有されるものであった。それゆえ、彼は「侵略」を「軍国主義」のみの属性と捉えることはできなかった。のみならず、「抑も攻撃精神の目的は、敵に対して勝を制する」ことであり、それ自体必ずしも「侵略」を意味するものではないのであって、「制勝主義は之を敵より見れば、威圧侵襲と認めらるゝ」に過ぎないものだ⁴⁶と水野は指摘している。彼によれば、本来「軍国主義」は「侵略」と因果関係を持つものではなく、ドイツ、イギリスを問わず、いかなる国も「敵に対して勝を制する」ために「国家を強くする」こと⁴⁷

が必要不可欠であり、その手立てこそが「軍国主義」なのであった。したがって、それは政治イデオロギーを超越するものとなる。

「軍国主義なるものは、国策国是等の如き政治上の主義でなく、国政運用上の方策に過ぎない。故に姉崎博士の憂ふる如く、侵略を目的とせるにあらず、圧制を手段とせるにあらず、況して軍閥跋扈主義にあらず、官僚万能主義にあらず、戦争唯一主義にあらず、唯時代の必要に基づく国民一致の国防主義を実行する為めの計策である。故に君主国にも、民主国にも、共和国にも、専制国にも、之を適用することが出来る。」

つまるところ、「軍国主義」を国家強盛の手段と位置づけることで「政治上の主義」と切り離れた水野にとって、「侵略」を「軍国主義」の属性とし、かつ「国際協調」重視を「デモクラシー」の本質的要素と捉えるような姉崎の「軍国主義」解釈は、受け入れられるものではなかったのである。このように、第一次大戦の性格づけとも絡めつつ、「デモクラシー」と「軍国主義」との関わりをめぐって、両者を対立概念と見なす姉崎と「軍国主義」を「政治上の主義」を超えた国家強盛の手立てと考える水野との間で見解の相違が示されたのであった。

他方で、そうした論争とは別に、「デモクラシー」と「軍国主義」は「両立」可能なものだとする議論を展開していた論者もいた。その代表的人物が、赤松が薫陶を受けた民本主義の唱道者である政治学者の東京帝大教授吉野作造であった。吉野は、姉崎のように「デモクラシー」と「軍国主義」が先験的に対立するものと認識することなく、また水野のごとく単に「軍国主義」が政治イデオロギーから超越した国家強盛の手段であるという立場もとるこ

とはなかった。

二 吉野作造の「民本主義と軍国主義の両立」論

姉崎・水野論争以前に、すでに吉野は第一次大戦末期の一九一八（大正七）年七月、『中央公論』誌上に「民本主義と軍国主義の両立」と題する論説を発表していた。彼はその論説において「軍国主義」と「デモクラシー」（民本主義）の関係性について考察しているが、その際に両者を本質的には別次元にあるものと捉えた。すなわち、「軍国主義」を「国際政策上の主義」としつつ、その対概念に「平和主義」を置き、一方「デモクラシー」には「内政上に表はるる、所の政治主義」という観点から「官僚主義」を対置したのであった。吉野は、「軍国主義」と「デモクラシー」を同列に論ずべき概念と位置づけることはなかったのである。では、それぞれ別次元にある「軍国主義」と「デモクラシー」はどのように交差するのか。

まず吉野は、「軍国主義」とその対概念である「平和主義」との分水嶺を、「国家の国際的生活の本態」が「協同」にあるのか、それとも「競争」にあるのかという点に見出した。いわく、「協同」とは「各国家長短相補ひ各々其特能によつて全人類の進歩に協力するといふ世界的人道主義と相通ずるもの」であり、「競争」とは「極端な孤立的個人主義のやうなもので、国と国とは其力を競うて相争ひ他を圧倒する事によつてのみ自家の生存と安全とを期し得べしとするもの」である、と。こうして、「ある一国の当局者並びに国民の多数が、国際的生活の本態を協同にありとするの信念に立てば、其国は即ち平和主義の国であり、之に反して競争にあ

りとするの信念に立てば、其国は即ち軍国主義の国たらざるを得ない事となる。¹¹⁾

だが吉野は「協同」に依拠した「平和主義」と「競争」に起因する「軍国主義」を観念的に分けてはいたものの、第一次大戦下の国際的な対立状況を単にこうした二分法で捉えることはなかった。特に「平和主義」国家が、必ずしも「軍国主義」を否認するとは限らないとの見方を示している。彼によれば、絶対的平和主義が保持されるのは「世界の総ての国乃至人類が残りにくく協同の確信を有するに至れる時」であり、「一人でも競争の主義を奉ずるもの、ある以上は、世界は常に不安に襲はるゝ」ことは避けられない。¹²⁾ それゆえに既存の国際秩序を維持せんとする「現状擁護主義」を掲げて「平和政策」をとる「民本主義に立つ英米」でさえ、「独逸のやうな普通外れの軍国主義者を抑へつける事に依つて初めて世界の平和は不安の状態から免れ得るとする實際の見地に立」たざるを得ず、自ら「其平和を確實に齎らす為めの手段として軍国主義をとるといふ事はあり得る」というのであった。¹³⁾

ここにおいて彼は、「当今世界に行はるゝ軍国主義」を二つのタイプに分けることとなる。ドイツなどの「軍国主義其者を目的とする者」と英米などの「軍国主義を平和的理想の手段とするもの」である。¹⁵⁾ かくて吉野にあつては「民本主義に立つ英米」が「軍国主義」を「目的」としてではなく、平和的理想を実現するための「手段」として受容する限りにおいて、「軍国主義」と「デモクラシー」（民本主義）は「両立」可能とされたのである。そして、「今日のやうな国際生活の下に於ては、如何なる国に取つても軍国的施設の欠くべからざるは論を俟ない」と主張する吉野からすれば、

この「軍国主義」と「デモクラシー」（民本主義）の「両立」は日本においても追求されねばならないものであった。

しかしその一方で、「デモクラシー」が「軍国主義其者を目的とする」方向へと転落する危険性をも吉野は指摘していた。もともと「デモクラシー」と「官僚主義」を対置させた彼のなかでは、「動もすれば、事あるを好み、又事あるに依つて利福を増すの機会を多く有する」官僚とは対照的に、国民が「平和の永続の上に大いなる利害関係を有つて居る事は大体に於て争ひ難い」という観念がもたれていたものであり、「平和の永続」は「デモクラシー」の担い手である国民の願望であるはずのものであった。だが彼は、現実の世界において、国民が一貫して「平和主義」を奉ずる存在だと考えていたわけではなかった。とりわけ日本国民に関しては、その「平和主義」への不徹底さに懸念を表明してさえた。

「国民一般の国際生活の本態に関する信念は必ずしも協同主義なるを常とするとは限らない。此点に関する我国今日の国民的信念の如きは寧ろ競争主義に偏するの傾向ありと認む可きではあるまいか。」¹⁶⁾

このように、他国を「圧倒」することによって「自国の生存と安全とを期」そうとする「競争主義」に日本国民が傾いているのではないかと吉野が危惧する背景には、東アジアにおける日本の勢力拡張という現実があつた。すなわち、日本は日清・日露の戦争を経て、台湾、朝鮮を植民地にするともに、第一次大戦参戦後の九月から二か月ほどの間に、中国山東省の「青島を陥れ、東洋に敵なし」の勢いを見せつつ、「更に進んで益軍備を拡張して東洋に覇を称せんと」していたのである。¹⁹⁾ 彼は、力を背景とした「国

際間の事は動もすれば利己的になり易い」がゆえに、「日本の政治家は稍もすれば功名を急ぎ国民は又狂熱的愛国心の勃発するに任せて、対韓対支政策を誤り東洋永遠の大計を誤ることはあるまいか」と憂慮したのであった。

こうした懸念から吉野は、国民が「競争主義」を回避し、「平和主義」の基礎となる「協同」の信念を堅持すべきだとして、「国際的正義公道」の順守を訴えていたのである。

「日本人が朝鮮、台湾の人々を継子扱ひとするは大に間違つてをる、宜しく真の兄弟として隔てなくしなければならぬ。支那民族に対しても同様で何処までも彼等に尊敬と同情とを以て其民族性を啓発し、共に立つて東洋の安全を保持するに努めなければならぬ。」

吉野にとって、「協同」の信念が国民に欠如したまま「民本主義」の流行を見る事は、必ずしも国際政策の根本義を平和主義に徹底せしむる所以となるとは限らない²²⁾のであった。否、むしろ「我国の利益のみを唯一の標準として利己的政策のみを取」るならば、結局のところ「国際的生活の本態を競争にありとする根本義によつて導か」れることとなる。それはまさに、日本が「軍国主義其者を目的とする者」になることであり、「此意味の軍国主義が横行する事となれば、其結果は啻に民本主義を抑圧して、国家の精力を無用に内争に消耗せしむるのみならず、又国家をして国際的協同生活の埒外に孤立せしむると云ふ、怖るべき不祥事を齎らす事」にならざるを得ないのであった²³⁾。

ともあれ吉野は、「軍国主義」と「デモクラシー」（民本主義）の「両立」を可能ならしむべく、「少くとも戦後の世界は協同主義

を以て国際的生活を統制すべき時代であると信」じ、「平和主義を根本の理想とする上に立つて軍国的経営を指導せねばならぬと考」えたのである²⁴⁾。

三 赤松における社会運動への傾斜と新人会の結成

さて、「競争主義」の回避と「協同」の追求を平和主義の条件としつつ、「軍国主義」と「デモクラシー」の両立を合理化した吉野の影響を受けた赤松は、その民本主義思想の実践に向けていかなる行動をとったのであろうか。

三高弁論部出身の赤松は一九一五（大正四）年九月に東京帝大入学後、後に岳父となる吉野が部長を務める緑会弁論部に所属し、彼の「愛弟子」となった。一年生の時にはヨーロッパにおける自由主義や社会主義、立憲政治などの史的展開を扱った吉野の「政治史」の講義を受講している。三高在学時に民衆政治家を志すことになった赤松にとって、民本主義者である吉野との邂逅はデモクラシーの学習を深化させる好機となった。入学後ほどなくして、民本主義を鼓吹する代表的論文二本が公にされる。公法学者で京都帝国大学法科大学教授である佐々木惣一の「立憲非立憲」（『大阪朝日新聞』一九一六年一月一日―一九日）と吉野の「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」（『中央公論』一九一六年一月号）である。これらの佐々木、吉野の二論文によって「特に政治を志す青年達は心をゆさぶられ、改めて周囲を見廻し、前途を考えざるをえなくなり出した」といわれるほどに、政治学徒たちに与えた民本主義政治学者吉野の影響力は大きかった。

しかしながら、吉野の薫陶を受けつつデモクラシー思想を吸収

していた赤松ではあったが、大戦中の一九一七（大正六）年一月に勃発したロシアのボルシェビキ革命は、彼の眼を社会運動へと向けさせる一つの大きな契機となった。もともと、当初ロシア革命に関する情報は日本に十分に伝わっておらず、社会主義の理論的指導者であった山川均でさえ、革命の詳しい情報を得る「特別なルート」もなく、その発生を新聞で初めて知ったに過ぎない状態であった。だが、「とにかく革命が起こって帝政が倒れた」ことに感激したと山川が回想しているように、他の日本の社会運動家たちの多くもロシア革命の実態を把握し得ないまま、革命が現実のものとなったことに一様に感動したのであった。赤松は当時の状況について、「漫然たる革命意識に昂奮」し、「社会主義者も無政府主義者も労働組合主義者も、たゞロシアに革命が行はれて、無産階級が天下の支配権を握つたといふ事実を無批判に簡單化して、これに多大の讃美と思慕を寄せたのであった」と振り返っている。こうしたロシア革命がもたらした「外部的衝動」は、社会運動家のみならず、赤松ら「時代思潮に敏感な青年知識階級」にも波及していった。

さらにまた、第一次大戦期の日本経済の混乱によって引き起こされた社会不安の増大は、赤松の社会運動への傾斜に拍車をかけていくことになる。大戦中の日本経済は戦争特需によって活況を呈し、工場の増設とともに労働に対する需要が促進され、一時的に労働者の賃金は増加したものの、彼らの生活は次第に苦境に追い込まれていった。いわゆる「戦争景気」によって成金が輩出し、その「奢侈逸樂を極めた」生活のために「未曾有の物価騰貴」がもたらされたのである。物価上昇率は労働者の賃金上昇率を上回

り、実質賃金が低下することで「富の分配の不公平」が生じ、労資間の対立が激化していたのであった。こうした労資対立の激化は、大戦期における同盟罷業件数の急増を招いた。幼少期より弱者救済の使命感を抱いてきた赤松にとって、労働者の生活苦は無視し得ない問題として捉えられていくことになるのである。

ロシア革命の勃発や労働問題の深刻化と相俟って、一九一八（大正七）年七月には米騒動と呼ばれる全国規模の民衆暴動が発生する。かかる事態は、彼ら「青年知識階級」に「歴史的なる時代転換期の到来を想はせ」ることとなり、社会運動に乗り出す気運を醸し出していくことになった。

ところで、このように社会運動への関心を芽生えさせていった赤松はやがて実際に社会運動に投ずる決意を固めることになるが、そのきっかけとなったのは一九一八（大正七）年九月初旬に開催された東京帝大と京都帝大の弁論部による連合演説会に出席したことであった。緑会弁論部の学生委員であった赤松は、同じく委員であった石渡春雄、宮崎龍介とともに連合演説会参加のため京都に赴いたが、演説会前夜の懇親会で京大側メンバーから「象牙の塔から抜けきらぬ態度をなじられ、強いショックを受け」ることとなった。京大側はすでに学労会なる団体を組織し、友愛会や労働運動家などとの関係を深めており、「学生が社会的に目を開き、社会運動に投ずる、点では京大のほうが東大よりも一歩先んじていた」のである。赤松らが「京都で受けた刺激は強く、焦燥の念に駆られて三人は帰京し」、「早く方向を定めて社会に飛び込もうとあせ」りを見せたのであった。

赤松、石渡、宮崎は東大において同志を集め、社会運動に乗り

出すための準備活動を企図したが、その拠点となるべく目をつけたのが三人の所属していた「普通選挙研究会」であった。この研究会は、吉野が緑会弁論部を中心とする「特志なる数名の学生諸氏と謀」り、普通選挙問題の包括的研究を目的として、一九一八（大正七）年一月に組織したものである。吉野によれば、研究会への「参加学生七、八十名に及びいつも活気ある討論とまじめな研究調査で終始してゐた」が、次第に「今にも事があつたら街頭に繰出しさうな勢ひ」が窺えるようになっていたという。³⁷

そうしたなかで行われたのが、吉野と右翼団体浪人会との立会演説会であった。事の発端は、君主への反乱を示唆する文言をめぐって筆禍事件（いわゆる白虹事件）を招いた大阪朝日新聞の社長村山龍平への九月二八日の浪人会と黒竜会のメンバーによる暴行事件であった。この暴行事件を『中央公論』一一月号の誌上で吉野が非難したことに憤った浪人会会員佐々木安五郎他三名が東大を訪れ、吉野に謝罪を要求したが応じなかったため、立会演説会の開催を申し込んだのである。一月二三日神田の南明俱樂部で演説会が開かれたが、会場は東大をはじめとする各大学の有志、友愛会所属の労働者などが詰めかけ「満場立錫の余地もな」かった。「興奮と熱氣とが渦巻」くなく、言論の自由を説く吉野の演説は浪人会側の演者たちを「圧倒」するものであった。かくて「南明俱樂部の凱歌に酔いしれるほどの感激にひたつた赤松、石渡、宮崎の三名は、緑会弁論部の他の人々と袂を分つて新しい思想団体を作る決意をした」のである。赤松らは社会運動に投ずるべく、東大法科学生らの「自由思想を懷抱せる同志」とともに一二月に「新人会」を結成することになったのであった。

だが、赤松らの師であり、新人会結成の「直接の動機をなした」立会演説会の立役者であった吉野ではあったが、「当初その計の相談を受けたときは、直に之に賛同」することはなかった。

「私は発企人たる諸君の誠意と熱心とに信頼して必しも強く反対はしなかつた。併し好ましいことではないと遠慮なき卑見を陳述したことを覚えて居る。そは一種の運動に足を踏み出すことに依て、青年学徒としての若々しさ―真理に対する柔軟性―を失ひはしないかと恐れたからである。」³⁸

赤松らは「もう少し勉強しろ勉強しろと絶えずブレイキをかけ」る吉野の言を聞き入れることなく、「新人会創立の一切の御膳立をしてから、……御義理一片の報告をしたに過ぎなかつた」。³⁹吉野は「本来の志を同うし乍ら各々独自の道を踏むべきを約し」つつ、新人会の活動に対し「傍観の態度を執ることにした」のであった。⁴⁰

四 国際連帯による階級闘争へ

新人会が結成されたのは、第一次大戦におけるドイツ降伏（一月一日休戦協定調印）の翌月のことであった。「威名赫々たる軍閥官僚の天国たりし独逸も脆い敗辱を蒙」ることになった。ドイツ敗北により、「自由解放主義に対して専制抑圧主義は確かに鉄壁の一角を崩された」⁴¹と見た赤松は、「世界の大勢が侵略的暴力的気運を脱して光輝ある人類共存の新氣運に向」かうことを期待した。それはまた、歩む道を異にしたとはいえ志を同じくする吉野が望む「協同」に基づく平和主義をもって「国際的生活を統制すべき時代」が到来する状況になることを意味するものでもあった。しかるに、一九一九（大正八）年一月に開催されたパリ講和会

議に日本は戦勝「五大国」の一員として参加し、敗戦国ドイツの中国山東省における旧権益の譲渡および赤道以北のドイツ領南洋諸島の割譲を要求するなど、依然として帝国主義的野心を示す一方、植民地朝鮮での三・一独立運動や中国での反日ナショナリズム運動（五・四運動）に直面していた。こうした事態を踏まえ、赤松は「我国現時の支配階級が唾棄すべき侵略主義を抱くことは蔽ふべからざる事実である」と批判した。デモクラシーの目標を「自由平等なる経済的政治的国際的の解放」に置く彼は、「国内に於ては国民の人格的解放を期し、国外に於ては各民族の独立と互重と信頼とに基き、世界恒久の平和を期する」との考えを表明していた。たとえば、日本の植民地である朝鮮の青年たちに次のような呼びかけを行っている。

「二国が自国の利益の為に他国の意思に反して是れを支配する如きは断じて不可である。況んや其人民を強圧して是れに差別的待遇を与へ威力と制度とを以て人民の声を圧伏するが如きは非人道の極みである。」

「我等の国を自由と云ふ勿れ幸福と云ふ勿れ。我等が人民の靈魂と肉体とは等しく今兄等を苦しめつゝある者の手に繋がれて悶へ苦しんでゐるではないか。」

ここにあるのは、階級的に抑圧された者同士 of 相互理解の精神であった。こうして、デモクラットたる赤松は国際連帯による階級闘争へと歩を進めていくのである。いわく、

「解放運動は国境に依りて局限せらるべきものではない。暴逆なる金力と鉄火より解放されて正義と平和の世界を齎す事は、世界人類共通の切願である。何が故に各国は今日互に高

く障壁を築いて対抗し虎視せねばならぬのか。……世界人類が真に一家を成して愛と平和を祝福するまで、我々の解放運動は其の鋒を収めてはならない。終局の目標を同じくする者は共に相携へて最後の勝利を期せよ。已み難き人類苦に痛む者は悉く来りて人類解放の義戦に参ぜよ。而して是の地上より有らゆる掠奪階級と武断階級の影を絶滅しなければならぬ。」

（注）

*1 赤松克麿『日本社会運動史』（岩波書店、一九五二年）一三九—一四〇頁。

*2 姉崎正治「十九世紀文明の総勘定（九）」『大阪毎日新聞』一九一八年二月八日付。

*3 姉崎正治「十九世紀文明の総勘定（四）」『大阪毎日新聞』一九一八年二月三日付。

*4 水野広徳「我が軍国主義論」（『中央公論』一九一九年一月）一〇七頁。

*5 同右、一一八頁。

*6 同右、一一六頁。

*7 同右、一一三頁。「国家を強くする」の意味を、水野は「単に軍隊や軍艦の如き武力のみを指すのではなく、人力、財力、物力の綜合力」（同上）の強化と捉えている。

*8 同右、一二三—一二四頁。

*9 吉野作造「民本主義と軍国主義の両立」（『中央公論』一九一八年七月）七三頁。

*10 同右、七四頁。

*11 同右、七三頁。

- *12 同右、七四頁。
- *13 吉野作造「欧洲戦局の現状及戦後の形勢を論じて日本将来の覚悟に及ぶ」(『新人』一九一七年三月) 四一頁。
- *14 吉野、前掲「民本主義と軍国主義の両立」七四頁。
- *15 同右。
- *16 同右、七五頁。
- *17 同右、七四頁。
- *18 同右。
- *19 吉野作造「国際競争場裡に於ける最後の勝利」(『新人』一九一四年二月) 二七頁。
- *20 同右、二七―二八頁。
- *21 同右、二七頁。
- *22 吉野、前掲「民本主義と軍国主義の両立」七五頁。
- *23 吉野、前掲「国際競争場裡に於ける最後の勝利」二八頁。
- *24 吉野、前掲「民本主義と軍国主義の両立」七六頁。
- *25 同右、七五頁。
- *26 H・スミス『新人会の研究―日本学生運動の源流』松尾尊兌・森史子訳(東京大学出版会、一九七八年) 四四頁。
- *27 吉野の郷里である宮城県大崎市古川の「吉野作造記念館」に、赤松克麿筆記『吉野作造講義ノート(一年政治史)』が所蔵されているが、吉野作造講義録研究会編『吉野作造政治史講義 矢内原忠雄・赤松克麿・岡義武ノート』(岩波書店、二〇一六年) に収録されるに至った。
- *28 三輪寿壮伝記刊行会編『三輪寿壮の生涯』(三輪寿壮伝記刊行会、一九六六年) 一六八頁。
- *29 山川菊栄・向坂逸郎編『山川均自伝』(岩波書店、一九六一年) 三六九頁。
- *30 赤松克麿『社会運動に於ける現実主義』(青雲閣書房、一九二八年) 九頁。
- *31 赤松克麿「大正時代における我国無産階級の進展」(『中央公論』一九二七年三月) 四八頁。
- *32 菊川忠雄『学生社会運動史』(海口書店、一九四七年) 七頁。
- *33 赤松克麿「新人会の歴史的足跡―創立十年にして倒れた彼の社会運動史的業績―」(『改造』一九二八年六月) 六九頁。
- *34 三輪寿壮伝記刊行会編、前掲書、一七五―一七六頁。
- *35 吉野作造『普通選挙論』(大鑑閣、一九一九年) 六頁。
- *36 吉野作造「日本学生運動史」(『岩波講座 教育科学』第一五冊、岩波書店、一九三二年) 二六頁。
- *37 立会演説会の顛末は、菊川、前掲書、三八―四六頁に詳しい。
- *38 三輪寿壮伝記刊行会編、前掲書、一七八頁。
- *39 「新人会記事」(『デモクラシー』一九一九年三月) 一六頁。
- *40 吉野作造「青年学生の実際運動」(『中央公論』一九二六年二月) 一三九―一四〇頁。
- *41 吉野、前掲「日本学生運動史」三二頁。
- *42 吉野、前掲「青年学生の実際運動」一四〇頁。
- *43 観風子(赤松克麿)「発刊の辞」(『デモクラシー』一九一九年三月) 二頁。
- *44 赤松克麿「国際平和運動と大和民族」(『デモクラシー』一九一九年一〇月) 三頁。
- *45 同右。
- *46 観風子(赤松)、前掲、二頁。
- *47 赤松、前掲「国際平和運動と大和民族」二頁。
- *48 同人(赤松克麿)「朝鮮青年諸君に呈す」(『デモクラシー』一九一九年四月) 一頁。
- *49 赤松克麿「解放運動の真精神」(『デモクラシー』一九一九年七月) 三頁。

Arguments over Democracy and Militarism During the First World War

FUKUSHIMA, Yoshikazu

(三六)

キーワード：デモクラシー、軍国主義、赤松克麿、吉野作造

Key words : democracy, militarism, Akamatsu Katsumaro, Yoshino Sakuzo